

ウィトゲンシュタインの「確実性」について

橋 本 哲

1. はじめに

ウィトゲンシュタイン（1889-1951）が晩年に関心を持った問題の一つに確実性に関するものがあつた。それは、『確実性の問題』（*On Certainty*¹）という草稿の形で残されている。

『確実性の問題』においてウィトゲンシュタインは、ムーア（G. E. Moore）の1925年の論文「常識の擁護（‘A Defence of Common Sense’, 以下「擁護」と表示する。）」と1939年の論文「外的世界の証明（‘Proof of an External World’, 以下「証明」と表示する。）」に対する批判を通じて、「知識（知っている）（Wissen, Ich weiß, knowledge, I know）」、「疑い（Zweifel, doubt）」、「信念（信じている）（Glauben, belief, believing）」、「確実さ（確実である）（Sicherheit, gewiß, certainty, certain）」²等の語の用法及びそれに関わる言語ゲームの基盤³を考察している。その考察の中で、彼は、「〈知識〉と〈確実さ〉は異なるカテゴリーに属する」（§308、強調はウィトゲンシュタイン）と言う。これは『確実性の問題』の重要な結論の一つである。本稿は、これらの語の関係がどのようなものかを明らかにするものである。

結論を先取りして言えば、「知識」、「疑い」、「信念」などの用語は通常の言語ゲームである認識的文脈の中で意味をなすものである一方、「確実さ」はそのような言語ゲームの基礎にあつて認識的ゲームを意味あるものにする「揺るぎない（feststehen, stand fast）」ものである⁴。

この「揺るぎないもの」が認識的文脈の中で扱われるものではないことを明らかにしたのは、後に取り上げるようにマリー・マッギン（Marie McGinn）である。また、それが、通常の言語ゲームにおいて規則の役割を果たして、言葉にして表現されるものではなく、行為の内に示されていることを明らかにしたのは、これも後に取り上げるモイヤル・シャロック（Danièle Moyal-Sharrock）である。この「確実さ」をウリクト（G. H. von Wright）は「前-

1 以下の『確実性の問題』からの引用は、紛らわしい場合を除いて節「§」だけの表示とする。なお、以下の引用文に関して、邦訳のあるものは参考文献を参考にして論者が訳した。

2 他にも Gewißheit (§115) とか「確信（Überzeugung, conviction）」 (§248) とも言われる。

3 『確実性の問題』で、基盤・基礎（Grundlage, foundation (§246))、根底・土台（Boden, ground, rock bottom (§248, 492))、基礎・土台（Fundament, bedrock (§498)) 等と表現されている。

4 「揺るぎないもの」については、後に取り上げるように、ムーアが「擁護」において挙げるものの他に『確実性の問題』の中で多くの事例が挙げられている。次節を参照。

知識 (Vor-Wissen, pre-knowledge)]⁵と呼び、マッギンは「ムーア型命題 (Moore-type proposition)]⁶、アンディー・ハミルトン (Andy Hamilton) は「ムーア命題 (Moorean proposition)]⁷、アヴラム・ストロール (Avrum Stroll) は「蝶番命題 (hinge proposition)]⁸、シャロックは「蝶番 (hinge)]⁹と呼んだ。本稿では基本的に「揺るぎないもの」と表現する¹⁰が、適宜、「ムーア型命題」とか「蝶番」等の表現も用いる。

本稿では、「知識 (知っている)」、「疑い」、「信念 (信じている)」、「誤り」という語の通常の言語ゲーム (認知的ゲーム) における用法批判を通じて、「揺るぎないもの」を、認知的文脈の中に位置付けることは論理的にできないということをあぶりだしていく。これは、ウイトゲンシュタインの言う「〈知識〉と〈確実さ〉は異なるカテゴリーに属する」 (§304) ことを検証することである。

このことを明らかにするために、まず次の第2節で「揺るぎないもの」の事例を取り上げる。その後、第3節で「知識 (知っている)」、第4節で「疑い」、第5節で「信念 (信じている)」、第6節で「誤り」それぞれについて、論理的に異なる二種類のを区別して、第7節で「確実さ (揺るぎないもの)」を取り上げる。そして第8節で「ムーア型命題 (揺るぎないもの)」を認知的文脈の中で扱うことはできないとしたマッギンの解釈、第9節で「蝶番 (揺るぎないもの)」を規則と考え、それは行為の内に示されるとしたシャロックの解釈を検討し、最後の第10節で以上の考察を踏まえて今後の課題を展望する。

2. 「揺るぎないもの」の事例

「揺るぎないもの」には、ムーアが「擁護」において確実だと述べるものや「証明」における「ここに私の手がある」の他、ウイトゲンシュタイン自身が『確実性の問題』の中で挙げるものもたくさんある。

ムーアが「擁護」において確実だと述べる命題には、「今生きている身体が存在し、それは私の身体である」、「私の身体は生まれて以来ずっと地球の表面に接しているか、またはそれは

5 ウリクトは、ウイトゲンシュタイン自身はそのような表現は使っていないという断り書きをした上で、この「確実さ」に該当するものを「前-知識」と呼んでいる。(Wright [1972], p. 172)

6 McGinn [1989], p. 102

7 Hamilton [2014], p. 2

8 Stroll [1994], p. 146

9 Moyal-Sharrock [2007], p. 68 なお、シャロックは、『確実性の問題』において「揺るぎないもの」の類比的な表現として「規則」、「端的な発話」を、また比喩的な表現として「足場」 (§211)、「基礎壁」 (§248)、「蝶番」 (§341)、「岩盤」 (§99)、「基盤」 (§498)、「根底」 (§248)、「基礎」 (§162) を取り挙げている。(Moyal-Sharrock [2007], p. 75)

10 『確実性の問題』では、揺るぎない・確実だ (feststehen, stand fast (§151))、しっかりつかまえる (festhalten, hold fast (§174, 225))、凝固する (erstarren, harden (§96))、動かさない (feststehen, immovable (§655))、揺れない (unwankend, unmoving (§403)) 等とも表現される。

ど離れずにいる」、「地球は私の身体が生まれる以前から何年も存在してきた」等がある¹¹。

また、ワイトゲンシュタイン自身が『確実性の問題』の中で確実だとして挙げるものには、「私には脳がある」 (§4)、「ここに病人が寝ている」 (§10)、「 $12 \times 12 = 144$ 」 (§43)、「私は月に行ったことがない」 (§111)、「私には曾祖父母がいる」 (§159)、「地球は突然消滅することはない」 (§234)、「車は大地から育ってこない」 (§279)、「私は L. W. と呼ばれる」 (§328) 等¹²がある。

なお、ハミルトンは、ワイトゲンシュタインが例示するもの全てをムーア命題と考えない。彼はムーア命題を狭く解釈していて、ムーアが「擁護」の中で掲げた命題をムーア命題の範例として、命題が化石化して (§657) ムーア命題になるには、時間がかかると考える。そして、このようなムーア命題と時間的・空間的に限られた確実さを表現する命題とを区別する¹³。

従って、ハミルトンによれば、「地球ははるか昔から存在してきた」とか「私には手が二つある」はムーア命題であるが、「ここに病人が寝ている」 (§10、強調は論者) は、ムーア命題と同じように確実ではあるが、時間的・空間的に限られた命題なので、彼はムーア命題と考えない。「ここに病人が寝ている」は、ムーア命題と違って、一時的に「探究の道筋の外」 (§88) にあるだけだからである。また彼は、ムーア命題を非人格的ムーア命題と人格的ムーア命題に区別する。彼によれば、「地球ははるか昔から存在してきた」は非人格的ムーア命題であるが、「私は生涯のほとんどを英国で過ごした」は人格的ムーア命題である。そして、非人格的ムーア命題がワイトゲンシュタインの言う「世界像」 (§93-95) を構成して、人格的ムーア命題や時間的・空間的に限られた場面での確実性である命題は「世界像」を構成しない、と考えている。ただハミルトンは、自分のするこうした区別をワイトゲンシュタインが明示的に行っている、とは考えていない¹⁴。実際、ワイトゲンシュタインは、「[[揺るぎないもの] について、] 私は様々な典型的な場合を挙げるができるが、共通する特徴を挙げることはできない」 (§674、[] 書きは論者の挿入による。以下の引用において同じ。) と言っており、彼は、ムーア命題を含めて確実性の問題を広い範囲で考えようとしている。

なお、本稿では考察を進めるに当たって、このようにムーア命題と時間的・空間的に限られた確実さを表現する命題とを区別することが適切だと思われる場合は、ハミルトンのするこの区別を参考にする。

¹¹ Moore [1959], p. 33

¹² 他にも §101, 104, 231, 234, 291, 420 等多数ある。

¹³ Hamilton [2014], pp. 93-94

¹⁴ Hamilton [2014], p. 93

3. 知識（知っている）について

ウィトゲンシュタインは、ムーアが外的世界の証明のために「証明」の中で行った「私はここに自分の手が二つあることを知っている」というのは、誤用である、と言う。

「ムーアが『私は……を知っている』という命題を誤用したのは、彼がこの命題を『私に痛みがある』と同じような、ほとんど疑う余地のない表白としてみなしているところにある。」 (§178)

ウィトゲンシュタインがこの節で、ムーアが何をもって「私は……を知っている」という命題を誤用したと考えているのか、分かりにくいところがある。ここでは彼は、ムーアが、「ここに自分の手が二つある」という命題を、「私に痛みがある」という命題と同じように疑う余地のないものとみなして、それを「知っている」と表現したのが誤用だ、と言っているのである。しかし、それがなぜ誤用になるのか。

ウィトゲンシュタインは、人が「私は……を知っている」という場合、その人は自分が知っていると主張する根拠を示すことができるし、求められればその根拠を示さなければいけない、と言う¹⁵。

「『私はそれを知っている』は、しばしば私の言明に対する適切な根拠を (richtigen Gründe, proper grounds) 私が持っていることを意味する。」 (§18、強調は論者)

そして「適切な根拠」は、根拠付けられるものよりも確かなものでなければならない。

「彼が信じていることが、彼がそれに与える根拠の方がその主張より確かであれば、彼は自分の信じていることを知っている、と言うことはできない。」¹⁶ (§243)

また、ウィトゲンシュタインは、人が「私は……を知っている」と語る時、証拠を挙げることができるということの他に、その人は、自分がそれを知ることでできる立場にいるのでなければならない、とも言う。

「ある場所で何が起っているか私は知っている、と誰かに断言するだけでは十分でないだろう。——私が知る立場にいたことを彼（他者）に納得させる根拠を与えることがなけ

¹⁵ ここに掲げた引用以外にも、同様の趣旨のものが §441, 504, 550, 555, 588 等にある。

¹⁶ この他に同趣旨のものとして §432 がある。

れば。」 (§438、強調は論者)

ムーアの外的世界の証明に異議を唱える者達は、ムーアに対して彼が証明の前提にしている「ここに自分の手が二つある」ことの根拠を求めた。それに対してムーアは、自分は「ここに自分の手が二つある」ことを証明する〔根拠を示す〕ことはできないが、「ここに自分の手が二つあることを知っている」、と断言することでもって答えたのであった。ここに自分の手があることは間違いない、だから自分はそのことを知っている、と断言したのである。ワイトゲンシュタインは、この文脈で使われる「知っている」は、「私は自分に痛みがあることを知っている」と同じように、誤用だと言うのである。ではムーアは、「私は自分の目で見て自分に手が二つあることを確かめた。だから知っている」とでも答えればよかつたのだろうか。これについては、ワイトゲンシュタインは、次のように批判する。

「もし盲人が私に、『あなたには手が二つありますか』と尋ねたとしたら、私はそのことを目で見て確かめようとはしないだろう。そこまで疑うなら、なぜ私は自分の目を信用すべきなのか私には分からない。」¹⁷ (§125)

自分には手が二つあるということは、ムーアのように両手を自分の眼前に掲げてそのように言う状況では、それを目で見たから知っているということではない。それは、それを目で見て確かめる以前から既に確実なことなのだ。

「私に手が二つあるということは、普通の状況下では、私が証拠として引き合いに出すことのできるどんなものとも同じくらい確実である。それ故、私は自分の手を見ることを証拠として取り扱うことはできない。」 (§250、強調は論者)

しかし、「私は自分に手が二つあることを知っている」という文が意味をなす、非常に特殊な言語ゲーム(認識的文脈)はあり得る。次に掲げるような場合である。

「ある人に手が二つあるかどうか(例えば両手の切断手術がなされたかどうか)私が知らない時に、彼が信頼に値する場合、その彼が自分には手が二つあるという彼の確信を、私は信じるであろう。そして、彼が自分はそのことを知っていると言えば、それは、私にとっては、彼の両手が、例えば布や包帯で隠されていない等々、彼が自分の両手が存在することを確かめることができたはずだということを、意味するだけのことである。」 (§23、強調はワイトゲンシュタイン)

¹⁷ この他に同趣旨のものとして§9がある。

問題は、ムーアのような自分の手を眼前に掲げる状況で、「私は自分に手が二つあることを知っている」と言う場合である。「どうして君はそのことを知っているのか」とその根拠を聞かれても、どう答えてよいか分からない。根拠を挙げることができないのだ。

ウイトゲンシュタインは、これを、「私は自分に痛みがあることを知っている」と言うのと同じように、「知っている」という語の誤用だと言うのである。人は、自分に痛みがある時、その証拠を挙げるができるだろうか。

ウイトゲンシュタインによれば、「知っている」という言葉を使う場合には、求められればより確かな根拠を示すことができるのでなければならないし、そのことを知る立場にいるのでなければならない。ムーアが知る立場にあったことには間違いはない。だが彼は、その根拠を挙げるができない。

「最高に信頼のおける人が、しかじかであることを自分は知っていると断言するとしても、それだけでは、彼がそれを知っているということを私に納得させることはできない。」 (§137、強調はウイトゲンシュタイン)

たとえムーア本人が最も信頼に足る人であったとしても、また、自分はそう思われていると彼が考えていたとしても、彼が自分は知っていると断言するだけではだめなのだ。また、人に二つの手があるのは当然だ、という常識に訴えるのもだめだ。常識が疑うことのできない確実なものとは限らないからである。

だが、本来、「知っている」という言葉は、疑うことのできない確かなことに使われるものではなかったか。「私には二つの手がある」というのは、自分の痛みと同じように疑うことのできない確かなことではないか。だから、「知っている」という言葉を使うことに問題はないのではないか。この点にこそ、この場合に「私は……を知っている」という命題が、誤用であるのかそうでないのかの重要なポイントがある。このことについて論じよう。

これまでは、「知っている」という言葉の通常の用法批判を通じて、「私は自分に手が二つあることを知っている」が「知っている」という語の誤用であることを見てきた。しかしウイトゲンシュタインは、明示的ではないが、この場合の「知っている」が誤用であることに、これまでの議論とは別の、より根本的な観点があることを示唆している。

それは、「疑うことのできない確かなこと」に、論理的な観点に基づいた二種類のレベルの違うものがある、ということである。ウイトゲンシュタインは次のように言う。

「『私は……を知っている』ということが、『私は……を疑わない』を意味するかもしれない、——しかし、そのことは、『私は……を疑う』という言葉が無意味 (*sinnlos*, *senseless*) であり、疑いが論理的に排除されている、ということの意味しない。」 (PI XI

p. 188、邦訳 p. 441、最初の強調はワイトゲンシュタイン、後の強調は論者)

ここでもワイトゲンシュタインの言っていることは分かりにくいだが、「知っている」は、どんなに確かなことであっても、疑いの可能性が論理的に排除されていない場合に、「私は……を疑わない」という意味で使う、と言っている。ここで彼は、疑いには、その疑いの可能性が論理的に排除されている場合と論理的に排除されていない場合の、レベルの違う二種類がある、ということを示唆している。彼は、「私は……を知っている」という表現は、疑いの可能性が論理的に排除されている場合には用いられない、と言っている。「知っている」という言葉が用いられるのは、疑いの可能性が論理的に排除されていない文脈（即ち認識的な文脈）だけであって、疑いの可能性が論理的に排除されている文脈では、「知っている」という言葉を使えない、というのである。

このことをハミルトンは、「知識は疑いの論理的可能性を含意する」（強調は論者）と表現して、次のように言う。

「ワイトゲンシュタインの考えは、その主張を疑うことが論理的に可能でなければ、——即ち、それを疑うことが意味をなさなければ——その場合、それは知識の対象になりえない、というものである。ムーア命題を疑うことは通常意味をなさない、それ故、それらは通常、知識の対象ではない、とワイトゲンシュタインは論じる。」(Hamilton [2014], p. 39、強調は論者)

「疑うことが論理的に可能である」ということは、「疑いの論理的可能性が排除されていない」ということであり、その意味をハミルトンは、「疑うことが意味をなす」こととして考えている。

通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）と異なって、通常の言語ゲームの外にある「揺るぎないもの」は、認識的ゲームとその基礎という言語ゲームの二層の構造から、それに対する疑いの論理的可能性が排除されている。疑いは「揺るぎないもの」を足場 (§211) にして、認識的ゲームの中で意味あるものとなる。「揺るぎないもの」は認識的な文脈の外にある。足場である「揺るぎないもの」に対する疑いは、通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）の中での疑いが「揺るぎないもの」を足場にして意味あるものになることから、ナンセンスになる。「ムーア命題（揺るぎないもの）」を認識的文脈の中で疑うことは、ハミルトンが言うように意味をなさない。

論者は、ハミルトンの言う「意味をなさない」を、「自己論駁に陥ることが免れない」という意味に理解している。このことについて説明しよう。

例えば、認識的文脈では、口論をしている二人の間で、「君は私を殴った」、「いや、私は

殴ってなどいない、たまたま手が触れただけだ」ということが議論になることがあるだろう。だがその場合、彼らの間で「手があるかどうか」が議論になることはない。彼らに「手があること」は、彼らの殴った、殴っていないという議論の前提にあって、彼らの議論を成り立たせているものの一つだ。「手があること」についての疑いは、この文脈の中では排除されている。彼らの議論の間で「手があること」を疑うことに本当に意味があるとすると、殴った、殴っていないという議論自体が成り立たなくなる。即ち、自己論駁に陥ることが免れないのである。

「私には手が二つある」は、通常、それを認知的文脈の中で用いることが論理的に排除されている「揺るぎないもの」である。

以上の議論を踏まえて、ムーアの「証明」の場合に、「ここに私の手が二つある」ことを知っているということが、論理的に排除されているということを論じよう¹⁸。

ムーアが、外的事物が存在することを証明しようとして、「ここに一つの手があり、またここにもう一つの手がある」と言いながら、自分の手を眼前に挙げて、自分に手が二つあることを自分の証明の前提にする場面である。ここでムーアが、その根拠を求める観念論者達の異議に屈して、「私はここに自分の手が二つあることを知らない」と言ったとしてみよう。この場合、ムーアは、自分の証明の前提として自分の手を掲げるのであるが、その行為自体が既に自分に手があることを前提にしている。即ち、自分で自分の手を挙げながら、「私はここに自分の手が二つあることを知らない」と言うのである。これは自己矛盾であり、自己論駁的である。従ってこの場合に、「私はここに自分の手が二つあることを知らない」と言うことはナンセンス（理解不能）な言明になる。ウイトゲンシュタインによれば、ナンセンスの否定はナンセンスなので¹⁹、「私はここに自分の手が二つあることを知らない」がナンセンスであれば、その否定である「私はここに自分の手が二つあることを知っている」もナンセンスになる。従って、「私はここに自分の手が二つあることを知っている」と言うことは、その否定が自己論駁に陥ることが免れないという意味で、論理的に排除されている。

ここで、ウイトゲンシュタインが比較に出した「私は自分に痛みがあることを知っている」が「知っている」という語の誤用であることを見てみよう。同じように「私は自分に痛みがあるがそれを知らない」と言ったとしてみよう。「自分に痛みがあることを知らない」というのは、正に「痛みがない」ということである。すると、「私は自分に痛みがあるが、痛みがない」というやはり自己矛盾したナンセンスな主張になる。ここで、「いや、無意識の痛みがあるの

¹⁸ 以下に取り上げる「ここに自分の手が二つある」は、時間的・空間的に限られた場面での確実性であり、ハミルトンに従えばムーア命題ではない。しかし、以下の議論はムーア命題に対しても成り立つと考えられる。

¹⁹ ウイトゲンシュタインはラムゼイへの手紙（1927.7.2）の中で、「ナンセンスの否定はナンセンスである」と書いている。（CL, p. 217、強調はウイトゲンシュタイン）なお、同様の考えは、「……『私は知らない』という表現はこの場合意味をなさない【ナンセンスである】」ということの意味する。従って当然【その否定である】『私は知っている』ということも意味をなさない【ナンセンスである】ことになる。（OC §58）にも現れている。

だ」と言ってみても、今度は「無意識の痛み」について、更なる説明が必要になるだろう。それは、通常の「痛み」という文法（言葉の用法）とは異なる新しい使い方をしているからだ²⁰。

このことは、「冷蔵庫にケーキがある」という命題と比較するとその違いが分かる。「冷蔵庫にケーキがある」は、それを「知っている」と言うことも「知らない」と言うこともどちらも有意味である。このことから「冷蔵庫にケーキがある」は、経験命題の身分を持つが、「ここに私の手が二つある」や「私に痛みがある」は、経験命題の身分を持たないことが示される。それを「知らない」と言うことが自己論駁に陥ることが免れず、意味をなさないからである。

以上をまとめると、「私はPを知っている」という発話は、通常、Pは確実で疑いのないことをその発話者は表明している。そしてその発話者は、Pを知る立場にあって、求められればPと主張する、より確かな根拠を示すことができるのでなければならない。それが、「私はPを知っている」と言うことのできる条件になる。

しかしより重要な点は、このような「知っている」の通常の用法批判以外に、論理的な観点に基づくものがあることである。それは、疑いのないことや確実さにはレベルの異なる二種類のものがある、というものである。一つは、通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）の中の指し手であって、どんなに確かなことであっても、疑いの論理的可能性が排除されていないものである。これは通常の「知識」の文法である。また、もう一つは、疑いの論理的可能性が排除されているものである。Pが「疑いの論理的可能性が排除されている」命題であるとき、「私はPを知らない」は自己論駁に陥ることが免れず、ナンセンスになる。「私はPを知らない」がナンセンスになるので、「私はPを知っている」もナンセンスになる。だから、「私はPを知っている」という表現を用いることができない。従って、この場合のPは通常の「知識」の文法を持たない。しかし、Pが「疑いの論理的可能性を含意する」場合、即ち、通常の知識の場合は、「私はPを知っている」も「私はPを知らない」もどちらも有意味であって、自己矛盾や自己論駁に陥ることはない。

ムーアの誤りは、「疑うことのできない確かなこと」に、疑いの論理的可能性が排除されているものと、それが排除されていないものという、レベルの違う二種類のものがあることを見て取れなかったことにある。彼は、通常の言語ゲーム（認識的な文脈）の中でしか考えることができなかった。「ここに私の手が二つある」を、「冷蔵庫にケーキがある」と同じような経験命題として考えていた。だから彼は、「ここに私の手が二つある」ことに対する懷疑論者たちの疑いも、正当な疑いだと考えていた。しかし、ムーアに対して異議を唱える当時の観念論者や懷疑論者もムーアと同じであった。彼らもそれを経験命題として考えていたのだ。

²⁰ 類似の議論が『青色本』で「無意識的思考」についてなされている。(BB, pp. 57-58, 邦訳 pp. 106-108)

ムーアは、観念論者達の疑いに根拠を示すことができなかつたので、「私はここに自分の手が二つあることを知っている」と断言することで応じた。「知っている」と言うことで、そのことに疑いの余地のないことを示そうとしたのである。しかしそれは、ムーアが、経験命題ではない「揺るぎないもの」に対して「知っている」という言葉を用いるものであった。それは、疑いの論理的可能性が排除されているものに対して「知っている」という言葉を用いるもので、ワイトゲンシュタインによって、「ムーアが『私は……を知っている』という命題を誤用した」 (§178) とされるものであった。これが、ムーアの「私はここに自分の手が二つあることを知っている」から得た、ワイトゲンシュタインの論理的洞察である。

4. 疑いについて

前節で論じた、ムーアによる「ここに私の手が二つある」は、時間的・空間的に限られた場面での確実性（ハミルトンによればムーア命題とは区別される確実性）についてのものであった。これに対して「私には手が二つある」は、時間的・空間的に限られていないムーア命題の一つである。本節では、この「私には手が二つある」のようなムーア命題を疑う場合を考察しよう。

ワイトゲンシュタインは、全てを疑う疑いは疑いではない、通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）では、疑いは際限なく続くことはなく、それはあるところで終わる、と言う²¹。

「私が示す必要のあることは、疑いはたとえそれが可能であるとしても、不必要だということ。言語ゲームの可能性は、疑いうるもの全てが疑われることに拠っていない、ということである。」 (§392)

また、通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）の中でなされる分別のある疑い（理解できる疑い）には、疑うための根拠が必要であり (§122)²²、疑いのゲーム自体が確実さを既に前提にしているとも言う。

「例えば、我々の探究全体が、ある命題に関しては疑いを差し挟む余地が全くない、そういう仕組みになっている、と言えよう。それらの命題は、探究が進められる道筋から外れた²³ところにある。」 (§88、強調はワイトゲンシュタイン)

²¹ 以下に引用したものの他にも §56, 123, 232, 450, 519, 625 に類似の主張がある。

²² 他にも §123, 323, 334 がある。

²³ 「揺るぎないもの」が探究から外れていることを、ワイトゲンシュタインは、§95では「神話」、§210では「鉄道の軌道から切り離されている」、また §657では数学の命題について「化石」と表現している。

「全てを疑おうとする者は、疑いに行き着くことが無いだろう。疑いのゲーム自体が確実さを既に前提にしている。」²⁴ (§115、強調は論者)

このようにワイトゲンシュタインは、「疑う」という語の通常の用法批判を通じて、通常の言語ゲームでは、疑いがどこかで終わるということを明らかにしようとしている。しかしワイトゲンシュタインは、「知っている」場合と同様に、「疑う」についても論理的な観点に基づいた違いがあることを示唆している。例えば、「私には手が二つある」ということを疑うとしてみよう。ワイトゲンシュタインは次のように言う。

「私には手が二つあるということ、今疑うとしたらどうだろうか。なぜ私は、それを全く想像できないのだろうか。もし私がそれ[私には手が二つあるということ]を信じないとしたら、私は何を信じるというのか。私は、この疑いを与えるような体系を全く持っていないのである。」 (§247)

「しかし、もっと正確にはこうである。私は、〈手〉という言葉や他の言葉全てをためらわずに私の文に用いるということ、疑ってみようとするだけで途方に暮れてしまうということ、——このことは、疑いの不在 (Zweifellosgigkeit, absence) がその言語ゲームの本質に属し、『いかにして私は……を知るのか』という問いが、言語ゲームを長引かせ、あるいは破棄することを示している。」 (§370)

「私には手が二つある」ことや、〈手〉という言葉を始め他の言葉を疑おうとすると途方に暮れてしまう、途方に暮れるということは、疑いの不在がその言語ゲームの本質に属していて、それに対する疑いは言語ゲームを破棄することを示している、とワイトゲンシュタインは言う。また、次のようにも言う。

「疑いが無分別な場合もあるが、論理的に不可能に見える場合もある。そしてこれらの間に明確な境界は無い様に見える。」 (§454、強調は論者)

ここでワイトゲンシュタインは、疑いに無分別な疑いと論理的に不可能に見える疑いがあるということを示唆している。無分別な疑いとは、認識的文脈の中でなされる理解可能な疑いのことであり、論理的に不可能な疑いとは、認識的文脈の中で疑いの論理的可能性が排除されている疑い、理解不可能な疑いのことである。「私には手が二つある」を疑うことは、疑いの論理的可能性が排除されているものを疑うことで、理解不可能な疑いに該当する。それは、通常

²⁴ 他にも§337, 354がある。

の言語ゲームの中で疑いを有意味なものにしている足場そのものを疑うものである。その疑いは、それに基づいて疑いが疑いとして成り立つその基礎を疑うもので、自己論駁に陥ることが免れない。従ってその疑いは、疑いの可能性が論理的に排除されている²⁵疑いである。「私は、自分の座っている木の枝を切り落とすわけにはいかない」(PI §55) のである。

次に、信念を取り上げよう。信念にも論理的な観点に基づいたレベルの異なる二種類がある。

5. 信念 (信じている) について

はじめに、「信念」と「知識」の違いを明らかにしておこう。

「信念」も、「知識」と同様に「意識状態でない²⁶」ことから、信念は、ワイトゲンシュタインの言う心的状態や心的出来事ではない。従って、信念と知識の違いが心的状態や心的出来事の違いにあるのではない²⁷。

「信念 (信じている)」と「知識 (知っている)」の違いは、信じていると言う場合、知識と違ってその「根拠」を必ずしも示す必要がないことにある。信念に正当化は無くても良い。

「誰かがあることを信じている時、『なぜ彼はそのことを信じているのか』という問いに、人は必ずしもいつも答えることができる必要はない。しかし、彼が何かを知っている時は、『どうして彼はそのことを知っているのか』という問いに、人は答えることができるのでなければならない。』²⁸ (§550)

さて、信念にも、知識や疑いと同様に、論理的な観点に基づくレベルの異なる二種類のものがあることをワイトゲンシュタインは主張する。

「十分に基礎付けられた信念の基礎に、基礎付けられていない信念がある。』²⁹ (§253)

十分に基礎付けられた信念とは、認識的ゲームの中での信念である。また、基礎付けられていない信念とは、認識的ゲームの外にあって、認識的ゲームを基礎付けている信念 (揺るぎないもの) である。

さて、基礎付けられていない「信念」について、ムーアの「証明」を参考にして考えよう。これは、第3節の「知識 (知っている) について」で論じたのと同じ議論がこの場合も成り立

²⁵ 「……疑いが論理的に排除されている」(PI XI, p. 188, 邦訳 p. 441)

²⁶ RPP2 §178

²⁷ 同じ趣旨のことは§42にもある。

²⁸ この他に関連するものとして§175がある。

²⁹ この他に関連するものとして§166がある。

つ、と考えられる。

実際にはムーアはそのように言うことはなかったけれど、眼前に自分の両手を掲げながら、「私はここに自分の手が二つあることを信じている」、と言ったとしてみよう。

この文の奇妙さは、「知っている」と言う場合と同様に、ここでもこの文の否定を考えてみると分かりやすい。即ち、眼前に自分の両手を掲げながら、「私はここに自分の手が二つあることを信じていない」、と言うのである。

これは、次に掲げるワイトゲンシュタインの言う「ムーアのパラドックス³⁰」と同類である。

「私は、雨が降っていると信じていない。しかし、雨は降っている。」(RPP1 §495)

ワイトゲンシュタインは、「雨が降っている、そして私はそのことを信じていない」について、これはもはや通常の言語ゲームをしているのではない、と次のように言う。

『「雨が降っている、そして私は、そのことを信じていない、ということが受け入れられたとせよ。」——私がこの仮定が受け入れているものを主張する時——いわゆる私の人格は分裂する。

『その時私の人格は分裂する』というのは、その場合、私は、もはや通常の言語ゲームをしていてではなく、別の言語ゲームをしているのである。」(RPP1 §820、強調は論者)

ここでいう「別の言語ゲーム」とは、特殊な言語ゲームではあるが理解できるゲーム³¹のことではなく、「私の人格は分裂する」ような言語ゲーム、即ち通常では「理解できない」言語ゲーム³²のことである。

さて、眼前に自分の両手を掲げて、「私はここに自分の手が二つあることを信じていない」と言うことは、「ここに自分の手が二つある、そして私はそのことを信じていない」と言うことと同義である。するとこれは、「雨が降っている、そして私はそのことを信じていない」と言うことと同類のことを表現しており、「私の人格は分裂する」ことになる。

従って、ムーアのような状況で、「私はここに自分の手が二つあることを信じていない」と言うことは、通常の言語ゲームをしているのではなく、別の言語ゲーム（通常の人には理解できないゲーム）をしているということになる。即ち、その言明はナンセンスだ、ということに

³⁰ PI X, p. 162、邦訳 p. 376

³¹ 雨天の時にマイクの調整をする目的で「本日は晴天なり」と言うような場合、また、日本語を知らない人が日本語の発声練習をするような場合が考えられる。

³² 普通の人から見ればその人を精神障害だと言うことができる (§155) ような言語ゲームである。従って、「別の言語ゲーム」というのは普通の人には理解できない言語ゲームのことで、それを「言語ゲーム」と呼ぶことが適切かどうかは問題がある。

なる。すると、ナンセンスな文の否定はナンセンス³³なので、「私はここに自分の手が二つあることを信じていない」という文の否定である「私はここに自分の手が二つあることを信じている」という文も、ナンセンスだということになる。

このように、ムーアのような状況（眼前に自分の手を掲げる状況）で発話する「ここに自分の手が二つある」という文は、それを「知っている」とも「疑う」とも「信じている」とも言うことが、言葉の誤用であり、ナンセンスなものになる。

次に、誤りについて検討しよう。

6. 誤りについて

ワイトゲンシュタインは、誤りについても、知識、疑い、信念と同様に、論理的な観点に基づくレベルの異なる二種類を区別する。

「いわゆるゲームの中にその場所が用意されている誤りと、例外的に起こる完全な規則違反の誤りの間には、区別がある。」 (§647)

「ゲームの中にその場所が用意されている誤り」というのは、認識的文脈の中で生じる誤りのことであり、「例外的に起こる完全な規則違反の誤り」というのは、認識的文脈から論理的に排除されている誤り (§155) のことである。従って、「例外的に起こる完全な規則違反の誤り」は、通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）の中でいう誤りと全く異なっている。

通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）における誤りについて、ワイトゲンシュタインは次のように言う。

「人は、誤りは原因を持つだけでなく根拠も持つ、と言うことができるだろうか。つまり、人は、誤りを犯すとその誤りを正しい知識の内に組み込むことができると、おおよそ言うことができる。」³⁴ (§74、強調はワイトゲンシュタイン)

誤りや勘違いは、通常の言語ゲームではごく普通にあることで、修正する（正しい知識の内に組み込む）ことができる。しかし、「揺るぎないもの」についての誤りはどうだろうか。例えば、「私には手が二つある」ことに、誤りや勘違いがあるだろうか。通常の言語ゲームでもしあるとすれば、それは極めて特殊な認識的文脈の中でのことであろう。

³³ 注19を参照。

³⁴ この他に関連するものとして§75がある。

しかし仮にそのような特殊な場合でなく、「私には手が二つある」ことを思い誤っていたとしてみよう。その場合、それは、単なる思い誤りでは済まされなくなる。その誤りは、私の普段の生活の様々な局面に及んでくる。

「私には手が二つある」ことは、例えば、ドアを開けて部屋に入る、携帯でメールを打つ、食事をする、荷物を運ぶ、お風呂場で体を洗う、ピアノの演奏をする、キャッチボールをする、拍手する、万歳と叫ぶ、転んで手をつく、相手の胸ぐらを掴んで殴る、怪我をした手が痛いと訴える、手の傷の手当てをする、合掌する等々、我々の生活の中で手を用いる無数の行為と関係している。だからもし、「私には手が二つある」ことが誤っていたとすると、日常生活のこれらの行為の全てが誤っていたということになる。これがどういう状況をもたらすことになるのか、想像がつかない。

従って、「私は、あらゆる判断を放棄すること無しに」 (§494)、「私には手が二つある」ことを誤ることはできないのである。仮にあるとしても、「私には手が二つある」ことを思い誤るということ自体が、どういうことを意味するのか理解できないのである。冷蔵庫の中にケーキがあることを思い誤るのは、誤りのレベルが異なるのである。「私には手が二つある」ことを誤るのは「完全な規則違反の誤り」である。

「ある状況において、人は誤りを犯すことはできない。(〈できる〉は、ここでは論理的に使われており、この命題はその状況において人は偽なることを言うことができない、ということを行っているのではない。)もし、ムーアが、彼が確実だと述べる命題と反対のことを言うとしたら、我々は、彼に同意しないだけでなく、彼を精神障害 (geistesgestört, demented)³⁵とみなすだろう。」 (§155、最初の強調はワイトゲンシュタイン、後の強調は論者)

認識的ゲームの中では、誤りを犯すことがあり得る。しかし、「私には手が二つある」ことの誤りは、ゲームの中の誤りであり得ない。それはゲームの中の指し手ではなく、「完全な規則違反の誤り」 (§647) である。即ち、ゲームの足場を構成するものに対する誤りであって、ゲームの中で誤りの可能性が論理的に排除されている誤り (§194) なのだ。無数の行為の中で手を用い、手があることを前提に行為しているにもかかわらず、「自分に手が二つあるのは誤りだ」と言うことは、実際にやっていることと言っていることが相反しており、自己矛盾している。従ってそれは、「論理的に排除されている誤り」であり、完全な規則違反の誤りである。

ハミルトンは、「知識は誤りの論理的可能性を含意する」 (Hamilton [2014], p. 68) と言う。これにならっていえば、「〈揺るぎないもの〉は誤りの論理的可能性を排除する」、となるだろう。

³⁵ 誤りとはみなされず精神障害とみなされる例が他に §71 に、関連するものが §70, 75, 155, 674 に挙げられている。

このように、「揺るぎないもの」について誤りを犯すことは、自己論駁に陥ることが免れない。それは、言語ゲームから逸脱する完全な規則違反であり、言語ゲームを破棄する (§370) もので、誤りとは言えないものである。

7. 確実さについて

これまで述べてきたように、「知っている」、「疑う」、「信じている」、「誤る」には、論理的な観点に基づくレベルの異なる二種類のものがあることが明らかにされた。これらの語を用いて有意味に表現できるのは、認識的文脈の中の指し手になる場合だけである。「私には手が二つある」のような「揺るぎないもの」を「知っている」とか「疑う」等と表現することは、極めて特殊な認識的文脈を除いて論理的に排除されており、自己論駁に陥ることが免れない。では、このような「揺るぎないもの」については、どう言えば良いのだろうか。

ウィトゲンシュタインは、「私には手が二つある」という命題に類する、ムーアの「擁護」に掲げられたような命題の場合、「知っている」を「揺るぎない確信を持っている」にしてはどうか、と次のように提案する。

「ムーアの命題において『私は知っている』を『私は揺るぎない確信 (unerschütterlichen Überzeugung, unshakeable conviction) を持っている』に置き換えてみたらどうか。」 (§86)

なお、「確実な」という言葉にも、ウィトゲンシュタインは、「知っている」や「誤る」等と同じように、レベルの異なる二種類を区別する。

「〈確実な〉という言葉で、我々は完全な確信を、あらゆる疑いの不在を表現し、また、この言葉によって他者を確信させようとする。それは主観的な確実性である。

しかし、何かが客観的に確実であるというのはどういう場合か。——誤りがあり得ない場合である。しかしそれはどういう可能性なのか。誤りが、論理的に排除されていなければならないのではないか。」 (§194、強調はウィトゲンシュタイン)

「主観的な確実性」というのは、通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）の中の指し手の一つである。それは、疑いや誤りの可能性が論理的に排除されていない確実性である。それに対して「客観的な確実性」というのは、通常の言語ゲームの外にあって、疑いや誤りの可能性が論理的に排除されている確実性である。それは、通常の言語ゲームの中の指し手にはならない。

「〈知識〉と〈確実さ〉は異なるカテゴリーに属する。」 (§308、強調はウィトゲンシュタイン)

ン)

ここで言う「知識」は、通常の言語ゲームの疑い、信念、誤りを含む。こうした「知識」とカテゴリーを異にする「確実さ」は、通常の言語ゲーム（認識的文脈）の中には現れない。それは、認識的ゲームの基礎にあつて、その認識的ゲームの足場を構成しており³⁶、そのゲームを意味あるものにしてている。この「揺るぎないもの」を認識的ゲームの中に持ち込んで、知っているとか疑う等と言うことは、自己論駁に陥ることが免れず、論理的に排除されている。

さて、ワイトゲンシュタインが、ムーア命題のような「揺るぎないもの」に対して、「知っている」を「『揺るぎない確信を持っている』」に置き換えてみたらどうか（§86）と提案するとき、そこで意図されている確信は、通常の言語ゲームの中で使われる主観的な確実性のことではない。それは、疑いや誤りの論理的可能性が排除されている確実さに対する確信であつて（§194）、客観的な確実性である。それは、通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）の基礎にあつて、枠組みとして通常の言語ゲームを基礎付けているが、自らは基礎付けられていない確実性である。

これまでの「知識」、「疑い」、「誤り」等についての考察から、言語ゲームにおいて、論理的な観点に基づいてレベルの異なる二種類のものが区別された。認識的な文脈の中で、知っているとか疑うということが、論理的に排除されているものと排除されていないもの、という区別である。このことは、言語ゲームが、「知識」と「確実さ」という二層の構造から成り立っていることを示唆している。「知識」である通常の言語ゲーム（認識的ゲーム）と、その基礎にある「確実さ」という構造である。

さて、ムーア命題のような「揺るぎないもの」は、言語ゲームの枠組みを構成し、認識的文脈の中では使われないことを明らかにしたのはマッギンである。次に、そのマッギンの解釈を検討しよう。

8. ムーア型命題に対するマッギンの解釈

マッギンは、この「揺るぎないもの」を「ムーア型命題」と名付ける³⁷。

彼女は、ムーア型命題は認識的文脈（知識、疑い、信念などの言葉によってゲームが有意味に行われる文脈）の中では使われない、ムーア型命題は我々の「実践の枠組み」であり、「言語の表現を有意味に用いるための条件」であり、それが疑いの余地のないことは非認識的な文

³⁶ §151, 211, 415

³⁷ McGinn [1989], p. 102

脈の中で考えられなければならない、と言う。そして、彼女の提示する非認知的な文脈の中での理解とは、ムーア型命題の確実さは、共同体の中で言語による記述の技術を訓練によって習得した結果である、というものである。マッギンのこうした解釈から、ムーア型命題が認知的文脈の中では使われないこと、そしてムーア型命題と認知的文脈で使われる命題との関係が、推論によるものではなく、訓練による技術の習得という因果的なものであることが理解される。

このことを明らかにするために、本節では8(1)で、ムーア型命題についての彼女の見解を検討し、次に8(2)で、彼女の提示する、非認知的な文脈の中でムーア型命題を理解するということがどういうことかを考察する。

8(1) ムーア型命題は認知的文脈の中では扱われない

マッギンは、「ムーア型命題」の特徴について次の3点を挙げる³⁸。

- (1) ムーア型命題より確実なものはない
- (2) ムーア型命題は、それを真剣に疑うことができる仮説とみなすことができない
- (3) ムーア型命題を誤るということがどういうことか理解できない

マッギンは、「ここに私の手が二つある」というようなムーア型命題³⁹に対する懐疑論者の疑いも、また、それに対してムーアがするように「私はここに自分の手が二つあることを知っている」と証拠を挙げずに「知っている」と強弁するのも、どちらも誤っており、全く別の理解が必要だとウイトゲンシュタインは考えている、と言う。

「懐疑論も懐疑論に対するムーアの応答も、どちらも納得のいくものでないということは、ムーア型命題に対する我々の関係が、肯定的な認知的 (*epistemic*) 用語 [『私は……を知っている』という言明] によっても、あるいは否定的な認知的用語 [『証拠を挙げることができないのならそれを知らない』という懐疑論者などの異議] によっても、どちらによっても適切に記述することができない。即ち、通常のあらゆる探究の背景を形成する命題に対する我々の関係は、何か全く違う仕方⁴⁰で理解されなければならない、とウイトゲンシュタインは思っている。[中略]『確実性の問題』の主要な要素の一つは、ムーア型命題を認知的な文脈の中に埋め込むこと (即ち、ムーア型命題を「私は……ことを知っている」、「私は……ことを疑う」等のような表現が [通常] なされる領域の中に置くこと) に対して、〈文法的〉な異議があることを我々に示す試みであるということは、全く明らかである。」(McGinn [1989], pp. 104-105、最初の二か所の強調はマッギン、後の二か所の

³⁸ McGinn [1989], p. 117

³⁹ マッギンは「ここに私の手が二つある」のような時間的・空間的に限定された確実さもムーア型命題として扱っている。

強調は論者)

マッギンの言う「あらゆる探究の背景を形成する命題」とは、ムーア型命題のことである。彼女は、ワイトゲンシュタインが、ムーア型命題を「知っている」とか「疑う」という認識的な文脈の中に埋め込むことに「文法的」な異議があることを示そうとしている、と言う。つまり彼女は、認識的文脈の中で、「知っている」とか「疑う」という言葉を用いてムーア型命題を表現することはできないとワイトゲンシュタインが言っている、と言う。なぜできないと彼女は考えるのか。

マッギンは、ムーア型命題は、我々の「実践の枠組み」(McGinn [1989], p. 102) とみなされるべきものだ、と言う。ムーア型命題は実践の枠組みだから、それを認識的な文脈の中に埋め込むことは文法的に問題がある、即ち、枠組みであるムーア型命題に対する関係を、経験的判断に対する認識的關係として処理することは誤っている、と彼女は言うのである。

このように、実践の枠組みとしてムーア型命題を位置付けて、認識的な文脈の中に埋め込まないで考えるとすると、即ち非認識的に考えようとする、次に問われてくる問題は、我々の実践とムーア型命題との関わりをいかに非認識的な用語で説明するか、ということになるであろう。

8 (2) ムーア型命題の確実さは、言語による記述の技術を訓練によって習得した結果である

マッギンはここで、ムーア型命題の確実さを、後期ワイトゲンシュタインの数学的命題の確実さに類比させる。これはどういうことか。

まず、マッギンは、論理学や数学の命題に対して持つ我々の確実さは、一般に、その命題が表現する真理が他ではあり得ないという直観形式に基づいていると考えられている、と言う。そして、『論理哲学論考』における前期ワイトゲンシュタインの考え方も、論理学や数学は直観形式に基づいた客観的に必然的なものを示すという、「客観主義者」の見解と呼ばれるものを支持していた⁴⁰、と言う。

しかし後期のワイトゲンシュタインは、前期のこのような考え方を完全に否定している、とマッギンは言う。後期のワイトゲンシュタインは、論理学や数学を「技術の体系」として考えており、その推論の仮借なさは、その思考技術を訓練によって習得した結果以外の何ものでもないと考えている、と言う⁴¹。つまり彼女は、論理学や数学の命題に対して持つ我々の確実さは、その推論技術を訓練によって疑うことなく受け入れてきた結果だと考えるのである。例えば、自然数列で、2が1に続き3が2に続くのは必然的だ、と我々が受け取るのは、自然数列

⁴⁰ McGinn [1989], pp. 124-126、例えば「 $(P \supset Q) \& P$ ならば Q 」や「自然数列で2は1の次に、3は2の次に来る」は、直観形式に基づき客観的に必然的なものを示している、というもの。

⁴¹ McGinn [1989], pp. 127-128

が客観的な形式としてあるからではなく、我々が自然数列を、日々の種々雑多な生活の中で際限なく訓練（練習）してきた結果であり、推論や計算を実践技術として我々が習得している（mastery of a practical skill）ことの単なる反映に過ぎない、と考えるのである。これによって論理学や数学の確実さは、前-認識的（pre-epistemic）であるということが帰結する⁴²。即ち、論理学や数学の確実さが、非認識的な文脈の中に置かれることになる、と言うのである。

論理学や数学の確実さについてのこのような考察を経て、マッギンは、論理学や数学の推論の必然性とその確実さが、思考・計算の実践技術を習得した結果であるとする考えを、「私には手が二つある」のようなムーア型命題に拡張して、ムーア型命題を非認識的な文脈の中で考えようとするのである⁴³。それはどのように進められるのか。

ここでマッギンは、規則はその「解釈だけでは意味が決まらない」（*PI* §198）というウィトゲンシュタインの、規則の解釈についてのパラドクス（*PI* §201）を持ち出す。規則は常に様々に解釈されうるため、規則の解釈は解釈によるだけでは決められないというパラドクスである。しかし、実際にはパラドクスはなく、解釈はどこかで打ち止まる。ウィトゲンシュタインは、この際限のない解釈の連鎖に終止符を打つのが、我々の実践、即ちその規則の慣習的な使用であると考えている。

「[道標は様々に解釈されうるが、] 人は、道標の決まった慣用、慣習がある場合に限って、道標に従う。」（*PI* §201）

マッギンは、ウィトゲンシュタインのこの考えを、ムーア型命題の確実性に援用する。彼女の考えをまとめると次のようになる。

我々は、言葉の解釈技術や言葉による記述の実践的な技術の習得を、共同体の中での訓練によって得る。そしてその技術は、共同体の構成員によって共有されている判断体系によって既に規定されている。するとここに、論理学や数学の確実性と類似の地平が現れてくる。即ち、論理学や数学の確実性とムーア型命題の確実性は、どちらも訓練によって実践技術を習得した結果であるという類似の地平である。一方は推論・計算技術の習得であり、もう一方は言語による記述の技術の習得という違いはあるが、それぞれの技術が、共同体の中での訓練によって習得されるという面では同じだ、という地平である。

「論理学や数学の命題が推論や計算の実践に対して果たす役割に類似する役割を、世界を記述するための我々の技術を統一的に構成する判断体系 [ムーア型命題] は、記述の実践に対して果たしている。」（McGinn [1989], p. 142）

⁴² McGinn [1989], pp. 133-134

⁴³ McGinn [1989], pp. 138-140

つまり「私には手が二つある」というようなムーア型命題は、我々が通常の言語ゲーム（認知的ゲーム）の中でする経験的記述の実践に対して、その技術の判断体系（経験概念を固定する役割）を構成している、と言うのである。

そして我々は、共同体の中での言語による記述の訓練という非認知的な手続きによって、言語で世界を記述する技術を統一的に規定する判断体系を習得する。ムーア型命題を疑問の余地のないものとする我々の態度は、こうした手続きによって、技術を習得した結果の反映であって、我々が他者と有意味に対話するための条件なのである。

「ムーア型命題に与る（commitment）我々の態度は、言語の表現を有意味に用いるための条件である。」（McGinn [1989], p. 160）

従って、言語表現を有意味に用いるための条件であるこの記述の技術の判断体系（ムーア型命題）について、その真・偽や正当化を問うことは、文法的に場違いなのである。真・偽や正当化を問うことが有意味なのは、認知的な文脈の中におけるものだけなのである。

このようにマッギンは、ムーア型命題を認知的な文脈に埋め込むのではなくて、ムーア型命題の確実さは、論理学や数学の命題の確実さと同じように、訓練によって技術を習得した結果であると考ええる。

論理学や数学の確実さは、推論や計算技術を共同体の中での訓練によって無条件に習得した結果であり、また、ムーア型命題の確実さは、言語によって世界を記述する技術を統一的に規定する判断体系を、即ちムーア型命題を、共同体の中での訓練によって無条件に習得した結果であると考え、共同体の中での訓練という契機は、人間の歴史の中で生じ発展してきた形態である、と考えるのである。

論理学や数学、ムーア型命題の確実さは、懐疑論者達が認知的な文脈の中で求めて得られると考える「本質的な確実さ」ではなく、我々が訓練によって技術を習得するという非認知的な実践技術を習得した結果だ、というのである。

以上のようにマッギンが、真・偽や正当化を有意味に問うことができるのは認知的な文脈の中だけだとしたこと、また、ムーア型命題の身分を我々の「実践の枠組み」として、認知的な文脈とは別のところに位置付けたことは、評価されるべきものである。

しかし、批判したい点もいくつかある。

- (1) ムーア型命題の確実さの淵源を、共同体の中で言語による記述の技術を訓練によって習得するという、非認知的な実践技術の習得に求めることは、ムーア型命題が確実さを持つに至った原因を説明するものである。だがそれは、ムーア型命題の確実さの内実を説明するものではない。その確実さは、言語ゲームの二層の構造、即ち言語ゲームの枠組みであ

るムーア型命題とそれを基礎とする認識的な命題との論理的な関係から生まれるものである。マッギンは、「ムーア型命題の確実さは、言語の習得とともにやってくる実際的な確かさである」(McGinn [1989], p. 157) と言って、ムーア型命題(実践の枠組み)の確かさを言語(記述の技術)の習得に還元するだけで、ムーア型命題と認識的な命題との論理的な関係を見て取ることができなかった。

- (2) マッギンは、ムーア型命題を、我々が世界を記述する統一的な判断体系(実践の枠組み)としてとらえ、それを言語による記述の技術の訓練によって習得すると考えている。しかし、「私には手が二つある」とか「車は大地から育ってこない」(§279)等のムーア型命題は、我々が世界を記述する技術の訓練によって習得したものなのだろうか。おそらく直にそのようなことを訓練されたことはないであろう。ムーア型命題には、我々が明示的な教育や訓練を経て得たのではないものが沢山ある。また、表現されるに至らないものも無数にあると思われる。このことについての論究がなされていない。
- (3) 言語による記述の技術を訓練によって習得することは、ムーア型命題を持つに至る原因として、言語ゲームの最も基本的な部分であるが、ワイトゲンシュタインはそれ以外に、文化・歴史を受け継いだ⁴⁴共同体の中での生活や実践⁴⁵、過去の体験⁴⁶、動物の本能にも似たもの⁴⁷、人間の自然誌⁴⁸なども、その原因として考えている。言語による記述の技術の習得は、ムーア型命題を持つに至る原因と密接に関連しているが、それを言語による記述の技術の習得としてまとめてしまうと、ムーア型命題を持つに至る多様な要因を見落としてしまうことになると思われる。

以上のようにマッギンは、ムーア型命題が我々の「実践の枠組み」であり、「言語の表現を有意味に用いるための条件」として、それを認識的な文脈の中で扱うことができないこと、また、ムーア型命題がどのようにして獲得されるのか、その原因を明らかにしたが、ムーア型命題の確かさがムーア型命題と認識的な命題との間の論理的な関係に基づくことまで論究しなかった。

次に、「揺るぎないもの」を「蝶番」と呼び、それを規則として考えたシャロックの解釈を

44 §94

45 §476

46 §429

47 §359, 475

48 「命令する、問う、話をする、しゃべることは、歩く、食べる、飲む、遊ぶことと同様に、我々の自然誌に属している。」(PI §25)、「私はある絵を見ている。それは、一人の老人が杖で体を支えながら、急な坂道を上っていく姿を表わしている。——しかし、どうして？ 彼がその姿勢でその坂道を滑り落ちているのだとしても、そのように見ることができるのではないか？ 火星人なら、この絵をおそらくそのように記述するかもしれない。なぜ我々はそのように記述しないのか、私には説明する必要がない。」(PI §139の欄外 (b)、強調はワイトゲンシュタイン)

見てみよう。

9. 蝶番に対するシャロックの解釈

9(1) 蝶番についてのシャロックの考え

シャロックは「揺るぎないもの」を「蝶番」と名付け⁴⁹、その概念的特徴として次の6点をあげる⁵⁰。

(1)疑う余地がない ((indubitable) 疑いや誤りは論理的に意味をなさない)、(2)基礎的である ((foundational) 正当化の結果として生じるものではない)、(3)非経験的である ((nonempirical) 諸感覚に由来しない)、(4)文法的である ((grammatical) 文法の規則である)、(5)言葉で表現しがたい ((ineffable) 語られえないものである)、(6)行為において自らを示す (in action)、というのがそれである。これらを参考にして、シャロックの考える「蝶番 (揺るぎないもの)」の身分を検討しよう。

シャロックは、「文法規則」を、言葉の使用規則としてだけ考えるのではなく、もっと広くとらえて、文法は意味の理解に必要な条件であり、我々の思考の足場に属するものも規則として考えようとする。

「我々は、文法規則の定義を不当に制限しないように注意しなくてはいけない。——文法規則は、特定の言葉の使用のためだけの規則ではない。

『文法に属するものは、すべて命題を実在と比較するために必要な条件(方法)である。即ち、すべて(意味の)理解に必要な条件である。』(PG⁵¹, p. 88、[邦訳『哲学的文法1』、pp. 112-113、強調はシャロック]) …… [『私には手が二つある』などは] 文法規則のようには見えないかもしれないが、それが『我々が物事を見る見方と、探究にそれらの形式を与える』限り、それが『我々の思考の足場』に属する限り、それは規則である。⁵² (Moyal-Sharrock [2007], pp. 103-104、強調はシャロック)

従って、「私は今椅子に座っている」、「地球は丸い」、「私には曾祖父母がいる」も文法規則だとシャロックは言う⁵³。

⁴⁹ Moyal-Sharrock [2007], p. 68、なお、シャロックが「揺るぎないもの」を「蝶番」と呼ぶのは§341に由来している。

⁵⁰ Moyal-Sharrock [2007], p. 72

⁵¹ ウイトゲンシュタインの著作 *Philosophical Grammar* の略号

⁵² この他にもシャロックは、「私以外の人々が存在する」は、「世界の人口がこの40年間に倍になった」という文を理解するのに必要な文法的条件であり、文法規則だと言う。(Moyal-Sharrock [2007], p. 105)

⁵³ Moyal-Sharrock [2007], p. 103、なお、シャロックもマッギンと同様に「私は今椅子に座っている」という時間的・空間的に限られた確実性も蝶番として扱っている。

さて、シャーロックは、ムーアが「擁護」に掲げる蝶番に共通する特徴について、次のように言う。

「それら〔蝶番〕が、経験的世界、即ち物理的対象、出来事、相互作用を指していて、このことが、それらが経験命題であるように思わせる。しかし、これらの文が共有する何か他のものもある。それらは、疑いの余地のない、疑いえない、非仮説的なものである。……それらは共に、偶然的で仮説的の性質であることと、疑うことが不可能で非仮説的の性質であることの両方であるように思われる。」(Moyal-Sharrock [2007], p. 85、強調はシャーロック)

彼女は、蝶番が経験命題で仮説的の性質を持つように思われると同時に、経験命題と違って疑うことが不可能で、非仮説的の性質を持つようにも思われる、と言う。「私には手が二つある」という命題は、経験的世界の出来事を指しているようにも思われるし、またそうでないようにも思われる、ということである。そして、このように経験命題のように見えながら文法規則として働くものが蝶番命題である、と言う。

「『確実性の問題』の中で、経験命題のように見せかけてだますもののは文法規則として働くこれらの命題が、いわゆる蝶番命題である。」(Moyal-Sharrock [2007], p. 87、強調は論者)

「全ての蝶番は文法規則として機能する。それらは、意味をなすことを条件付ける。」(Moyal-Sharrock [2007], p. 105、最初の強調は論者、それ以外の強調はシャーロック)

このようにシャーロックは、蝶番は文法規則として機能する、と言う。だが、ワイトゲンシュタインはもっと慎重で、彼は、蝶番が規則だとまでは断定していない。彼は、蝶番について「ゲームの規則の役割に似ている (ähnlich, like)」 (§95、強調は論者)、とか「規則の性格 (Charakter, character) を持つ」 (§494、強調は論者) としか言っていないのである。

だが、シャーロックが、蝶番は文法規則として機能すると言うのはどういう意味だろうか。

「蝶番は、探究の対象ではなくて探究の規則である。その規則を我々は、疑問の余地なく受け取って用いる。」(Moyal-Sharrock [2007], p. 91、強調はシャーロック)

蝶番は、探究の規則として機能する。探究の規則として機能するというのは、「記述の対象ではなく、記述の足場の一部のように働く」(Moyal-Sharrock [2007], p. 92) ということであ

る。これは、マッギンがムーア型命題を実践の枠組みと考えるのと軌を一にしている。
かくして彼女は、次のように言う。

「文法規則は、我々の言語ゲームの外にある。それは、文法規則が規定を必要とするからではなく、ゲームを可能にするからだ。文法規則が意味を可能にする。それ故、文法規則自身が意味をなすのではない。」(Moyal-Sharrock [2007], p. 94、強調はシャロック)

このようにシャロックは、蝶番(文法規則)は言語ゲームの外にあって、それが意味を可能にし、言語ゲームを可能にする、と言う。

またシャロックは、蝶番を疑うことは論理的に不可能であると、次のように言う。

「我々があること[蝶番]について、それが客観的に確実であるというのは、主観的または心理的な確信の問題ではない。また、単に疑われないということでもなく、疑う必要が無いということでもない。疑うことが、論理的に不可能なのである。」(Moyal-Sharrock [2007], p. 73、強調は論者)

ここでシャロックが、「論理的に不可能」と言っているのはどういう意味で言っているのだろうか。シャロックはこの引用に続けて、ワイトゲンシュタインの「私はあらゆる判断を放棄することなしにこの命題を疑うことができない」(\$494、強調はシャロック)を引用して、「車が大地から育ってくるかこないかを疑うことは、我々人間の感覚の範囲(bounds of sense)を放棄するに等しい」(Moyal-Sharrock [2007], p73、強調は論者)と言う。そして次のように続ける。

「普通の人間の理解の範囲(within the ken)の内に留まっている間は、ある信念[蝶番]について疑ったり誤ったりすることは、論理的に不可能なのである。」(Moyal-Sharrock [2007], p. 74、最初の強調は論者、後の強調はシャロック)

こうした推論をみると、シャロックは、ある信念(蝶番)を疑ったり誤ったりすることが「論理的に不可能だ」という意味を、「人間の感覚の範囲を放棄する」こと、「人間の理解の範囲を超える」こととして考えているように思われる。しかし、感覚の範囲を放棄すること、人間の理解の範囲を超えることが、どうして蝶番を疑うことの論理的不可能性に結びつくのか、その説明がここでは明確ではない。

また彼女は、蝶番について次のように言う。

「我々の基礎的な蝶番——我々の言語ゲームの足場を作り上げている信念——は、合理的にはなく、因果的に現実につながとめられている。」(Moyal-Sharrock [2007], p. 82、強調はシャロック)

我々が基礎的な蝶番を獲得する（蝶番が現実につながとめられる）のは因果関係に基づく、というのはマッギンと同じである。マッギンはムーア型命題は言語による記述の技術を訓練によって習得したものである、という因果関係による理解をしていた。

また、誤りについて、シャロックは次のように言う。

「誤りは、不注意や疲労、無知から我々が犯すものであるが、『車が大地から育ってくる』⁵⁴という誰かの確信を、『誤り』と呼ぶことはできないだろう。」(Moyal-Sharrock [2007], p. 73)

彼女は、不注意や疲労、無知から、我々は誤りを犯す、と言っている。確かに、認識的な文脈においてはそうである。しかし、この基準からいくと、蝶番に対しても、我々は誤りを犯すことがあり得ることになる。即ち、「車が大地から育ってくる」という誤った確信を、例えば無知から持つこともあり得ることになる。しかし彼女は、「車が大地から育ってくる」という確信を「誤り」とは呼べないと言う。そしてワイトゲンシュタインにならって、それは心的障害だ⁵⁵、と言う。だが、なぜそれを誤りと呼べないのかについての説明はない。

またシャロックは、文法規則（蝶番）を言語ゲーム（認識的ゲーム）の中で定式化する（蝶番を語る）ことは、いかなる助言も必要ない時に規則を述べることである、と次のように言う。

「文法規則を言語ゲームの中で定式化することは、……あたかもそれらが記述あるいは何かを伝える言明であるかのように、意味の境界を定式化することである。これは、ゲームの中に割り込みをすることである。——思い出すのにいかなる助言も必要とされていない時に、規則を述べることである。」(Moyal-Sharrock [2007], p. 95、強調はシャロック)

文法規則を言語ゲーム（認識的ゲーム）の中で定式化することは、必要とされていない時にそれを述べることだ、だから、それを述べることは不必要だ、と彼女は言っているように見える。不必要だということは確かに強調されても良い。だが、ワイトゲンシュタインは、不必要だというよりはむしろ、端的にナンセンスだと言っている。

⁵⁴ 「車が大地から育ってこないということは絶対確実だ。」 (§279) という例がある。

⁵⁵ Moyal-Sharrock [2007], p. 73

「[今度は] 私が医者で、一人の患者が私の下に来て、自分の手を私に示してこう言う、と仮定しよう。『ここに手のように見えるものは、精巧な模造品なんかではありません、本当に手なのです。』そう言ってから、彼は、自分の怪我のことを話し始める。——私はこれを、余計ではあるけれど、一つの報告として本当に見なすであらうか。私は、むしろそれを、確かに報告の形式をしてはいるけれど、ナンセンスだと思っうのではないだろうか。」 (§461、強調は論者)

ここでワイトゲンシュタインが「ナンセンスだと思う」と言うのは、次のようなことから、と論者は理解している。

医者は怪我をした人の手を治すのであって、模造品の手を治す(修理する)のではないということが、医者と患者の間で行われる言語ゲームの前提にある。それは蝶番である。しかし患者の報告は、その前提を無視するものである。あるいはそれを破棄するものである。というのは、彼の報告が真剣に取り上げられるべきものだとすると、彼は自己論駁に陥ることが免れなくなるからである。なぜなら彼は、医者は怪我をした人の手を治すという枠組みに立ちながら、彼の報告はその枠組みを自ら損ねていて、医者と患者の間に成り立っている言語ゲームを破棄しているからである。よって、彼の報告は、医者と患者という言語ゲームが成り立っている限り、論理的に排除されている報告であり、ナンセンスなのである。

しかしまた、シャーロックは、次のようにも言う。

「蝶番を言葉によって表現できないことを強調することは、(普通の状況において)既に確実であることを語ることが余計なことであり、それをはっきり表現することは無駄な繰り返しであるということ、単に指摘することだけでなく、蝶番を語ることが論理的にできないことを明白にすることである。」 (Moyal-Sharrock [2007], p. 96、強調はシャーロック)

ここでは彼女は、蝶番を言葉で表現できないことを強調することは、無駄な繰り返しだけでなく、「蝶番を語ることが論理的にできないことを明白にすることだ」と言っている。ワイトゲンシュタインが先の§461でナンセンスだ(理解できない)と言うのは、そのような報告は、報告の形式をしていても、論理的に排除されているからナンセンスだ、という意味からである。しかしシャーロックは、蝶番を言語ゲームの中で語ることができないと強調することが、なぜ論理的にできないことを明白にすることになるのかということについて、それ以上説明しない。彼女は、蝶番はゲームに属さず、ゲームの中で自らを示し得るにすぎない、と言うだけだ。

「それ〔蝶番〕は、ゲームを可能にし、できるようにするが、ゲームには属していない。……ウィトゲンシュタインにとって、文法規則は、言語ゲームの外でのみ語られ（あるいは正式に言うときに出され）得るもので、それらはゲームの中で自らを示し得るにすぎない。」(Moyal-Sharrock [2007], p. 97、強調はシャロック)

蝶番はゲームの中で自らを示し得るということは、蝶番の确实さは行為に表されるということである⁵⁶。

9 (2) 蝶番の起源についてのシャロックの解釈

シャロックは、我々が蝶番の确实さを獲得するにあたって、二つの仕方を区分する⁵⁷。一つは、自然に吸収・取り込まれることであり、またもう一つは、訓練によることである。

自然に吸収・取り込まれる确实さとは、教えられることなく持つに至る自然な、動物のような、本能的な确实さのことで、その确实さは、言葉を理解できるということを含意しない。この例として、シャロックは、「私は身体を持つ」、「手は我々がそれに注意を払わない時でも消え失せることがない」等を挙げる。

「私はこれまで『私は身体を持つ』ということ学んだことはないし、私が身体を持っているかどうか考えたり、チェックしたり、テストするために立ち止まったりすることもない。……身体を持つことに伴っているのは、本能的な動物の确实さである。」(Moyal-Sharrock [2007], p. 108、強調はシャロック)

また、訓練によって獲得される确实さとは、我々が技術や習慣を獲得するように、文化的、教育的訓練を通じて、あるいは暗黙のうちに繰り返し曝露されることを通じて獲得される、条件付けられた确实さのことである。

「獲得された蝶番は、計画的な繰り返し（訓練）を通じて、あるいは自然な繰り返し（繰り返される曝露 (repeated exposure)) を通じて、揺るぎないものにされる。」(Moyal-Sharrock [2007], p. 111)

「我々が判断を教えられるというのは、その後続く判断を基礎付けるひとまとまりになった公理を吸収することによって始めるというのではなく、判断そのものを吸収することによって始める。だから、我々は、我々自身、実際、その判断をしているのではない。

⁵⁶ 「蝶番の确实さは、考え抜かれたものではなく、行為に表わされる。」(Moyal-Sharrock [2007], p. 98)

⁵⁷ 以下、Moyal-Sharrock [2007], pp. 104-105

我々は、どんな推論も推測もしていない。……〈判断〉はここでは、帰納的、あるいは決断的などんな香りも持たない。『あらゆる人間には両親がいる』という我々の確信は、我々の側の判断行為の結果ではない。それはその周りにあるものによってしっかりと固定されている。」(Moyal-Sharrock [2007], pp. 111-112、強調はシャロック)

このようにシャロックは、人間の自然な、動物のような本能と、教育や訓練あるいは自然な繰り返しを通じて、蝶番の確実さを我々は非認知的に受容する、そしてその確信は、判断行為の結果ではなく、その周りにあるものによってしっかりと固定されている、と言う。

なお、シャロックは、蝶番が、「因果的に現実につながとめられている」(Moyal-Sharrock [2007], p. 82)、とすることによって、蝶番の確実さ自体も、本能的なものや訓練(繰り返しによる暴露を含む)による因果的な条件付けから得られる、と言っているように見える。それは、「身体を持つことに伴っているのは、本能的な動物的確実さである」とか「いくつかの事実が基礎の中に溶解されて、我々の概念的足場の一部になった」(Moyal-Sharrock [2007], p. 143)とされていることから伺われる。

しかし、本能的なものや訓練によって確実さを得るというのは、確実さを獲得する原因を説明するものあって、確実さの内実(言語ゲームの二層の構造に由来する論理的な関係に基づく確実さ)を説明するものではない。この批判は、先のマッギンに対する批判と同じものである。ただ、マッギンの場合、ムーア型命題の獲得に関して、共同体の中で言語による記述の技術を訓練によって習得することしかなかったが、シャロックの場合は、多様な原因を考慮しており、この点については、マッギンの解釈より評価できるように思われる。

9 (3) 蝶番についてのシャロックの解釈について

以上からシャロックは、蝶番についての解釈を次のようにまとめる。

「行為において確実なことは疑われない。論理は我々の実践の内に——我々の行為の内に——埋め込まれている。我々の生活、我々の行為は、我々にもし分別があるなら、あることがらを疑わないし疑うことができないことを示している。確実さはここでは選択ではない——それは、我々の探究の論理に属する。……

文法規則は、言語の正しい使用を規定する。全ての蝶番を文法規則として考えることは、文法規則を言葉の使用にとって明示的な教示あるいは規約以上のものと考えている。文法規則は、より一般的には、本能的に獲得されるか後から獲得されるものかのどちらかであり、それは意味の境界である。」(Moyal-Sharrock [2007], p. 99、強調はシャロック)

これまで述べてきたシャーロックによるウィトゲンシュタインの確実性についての解釈には、評価できるところが多くある。「ある信念〔蝶番〕を疑ったり誤ったりすることは、論理的に不可能である」、「蝶番は、探究の規則である」、「蝶番は文法規則であり、それが意味を可能にして言語ゲームを可能にする」、「蝶番の確実さは行為のうちに示される」という考えがそうである。だが、批判したい点もいくつかある。

- (1) シャーロックは「蝶番は文法規則である」と言うが、ウィトゲンシュタインはもっと慎重で、「ゲームの規則の役割に似ている」とか、「規則の性格を持つ」としか言っていない。
- (2) シャーロックは、ウィトゲンシュタインの言う、ある信念（蝶番）を疑ったり誤ったりすることが論理的に不可能だという意味を、人間の感覚の範囲を放棄すること、人間の理解の範囲を超えることとして解釈している。だが、人間の感覚や理解の範囲を超えると、ある信念（蝶番）を疑ったり誤ったりすることが、なぜ論理的に不可能になるのかが明らかでない。
- (3) シャーロックは、誤りは不注意や疲労、無知から我々が犯すものであると言う。だが、そうだとすると、例えば無知から蝶番を誤ることもあり得ることになる。しかし、彼女は、それは誤りではなく心的障害だとするが、なぜ誤りと考えられないのか、その理由が明らかでない。
- (4) シャーロックは、言語ゲームの中で蝶番を語るができないことについて、言語ゲームの中では、蝶番を語ることは不必要であるだけでなく、それは論理的に語るができず、行為に示されるだけだ、と説明する。だが、蝶番を語るがなぜ論理的にできないのかについて説明がない。シャーロックはこの他にも、「論理は我々の実践の内に埋め込まれている」とか「確実さは選択ではなく我々の探究の論理に属する」と言う。ここにはある洞察があるようにも思われるが、彼女がどういう意味で「論理」という言葉を用いているのか、明らかでない。
- (5) シャーロックは、蝶番が因果的に現実につながり定められていると言うが、蝶番の確実さ自体も、本能的なものや訓練による因果的な条件付けから得られると言っているように見える。しかし、蝶番の確実さは、蝶番とそれを基礎とする認識的ゲームという、言語ゲームの二層の構造による論理的な関係から生まれるものである。原因によって蝶番の確実さの内実を説明することはできない。彼女は、蝶番の確実さを言語ゲームにおける蝶番と認識的な命題との間にある論理的な関係から見て取ることができなかった。

10. まとめ

我々は、「知識」、「疑い」、「信念」、「誤り」という語を認識的文脈の中で有意味に用いることができるが、「確実さ（揺るぎないもの）」に対してはこれらの語を用いることができない。

「知識」と「確実さ」はカテゴリーが異なる。「揺るぎないもの」は認識的ゲームの基礎にあって、規則のような役割を果たし、ゲームを有意義なものにする。それは行為の内に示されている。

通常の言語ゲームの中で、「揺るぎないもの」を語ったりそれを疑ったり誤ったりすることが論理的に不可能だという意味は、言語ゲームの構造——「揺るぎないもの」とそれを基礎とする認識的ゲーム（通常の言語ゲーム）という二層の構造——から、「揺るぎないもの」を語ったり疑ったり誤ったりすることは、自己論駁に陥ることが免れない、ということである。この意味で、「揺るぎないもの」を語ったり疑ったりすることは論理的に不可能なのである。

マッギンは、ムーア型命題は我々の「実践の枠組み」であり、それを認識的な文脈の中に押し込むことはできない、とした。また彼女は、我々が記述の技術を訓練によって習得することで、ムーア型命題を獲得するに至るといふ、ムーア型命題と訓練との因果的な結びつきを明らかにしたものの、実践の枠組みであるムーア型命題の身分がどのようなものかについては論究しなかった。

シャロックは、蝶番は探究の規則であり、蝶番命題は文法規則の表現であって、蝶番の確実さは行為に示されるとした。しかし彼女は、ウィトゲンシュタインが蝶番を疑ったり誤ったりすることが論理的に不可能だと言ふ意味を明らかにすることができなかった。

ウィトゲンシュタインが明らかにしようとしている「確実さ」の内実、それは言語ゲームを構成する「揺るぎないもの」とそれを基礎とする認識的ゲームとの二層の構造から生まれる論理的なものであって、それが獲得される原因によって、その確実さの内実を説明することはできない。「揺るぎないもの」の確実さの内実、言語ゲームの構造からくる論理的な関係の中で明らかにされなければならない。このことは、第3節から第7節までの知識や疑いの文法を考察する中で言及してきたことである。従って、今後の課題は、言語ゲームが「揺るぎないもの」とそれを基礎とする認識的ゲームの二層の構造からなること、「揺るぎないもの」と規則の関係、また、「揺るぎないもの」と原因の関係について、ウィトゲンシュタインの考えを彼のテキストから検証していくことである。

参考文献

- Hamilton, A. [2014], *Wittgenstein and On Certainty*. Routledge.
 McGinn, M. [1989], *Sense and Certainty*. Basil Blackwell.
 Moore, G. E. [1959], *Philosophical Papers*. George Allen and Unwin Ltd, The Macmillan Company.
 Moyall-Sharrock, D. [2007], *Understanding Wittgenstein's On Certainty*. Palgrave.
 Stroll, A. [1994], *Moor and Wittgenstein on Certainty*. Oxford.
 Wittgenstein, Ludwig, *Tractatus Logico-Philosophicus*. Trans. C. K. Ogden, [1922] Routledge, Rep. [1992], 『論理哲学論考』, ウィトゲンシュタイン全集 1, 大修館書店, 1975年

- , *Philosophical Grammar*. Edited Rush Rhees. Trans. Anthony Kenny, Basil Blackwell, 1974, 『哲学的文法1』山本信訳, ウィトゲンシュタイン全集3, 大修館書店, 1975年(引用において「PG」と表示)
- , *The Blue and Brown Books*. 1972, Basil Blackwell Oxford, 2nd edn. 1969, 『青色本・茶色本』大森荘蔵訳, ウィトゲンシュタイン全集6, 大修館書店, 1975年(引用において「BB」と表示)
- , *Philosophical Investigation*. Trans. G. E. M. Anscombe, 2007, Basil Blackwell, 3rd edn. 2001, 『哲学探究』藤本隆志訳, ウィトゲンシュタイン全集8, 大修館書店, 1976年(引用において「PI」と表示)
- , *On Certainty*. G. E. M. Anscombe and G. H. von Wright (eds). Trans. D. Paul and G. E. M. Anscombe. Basil Blackwell Oxford, 1979, 『確実性の問題』黒田亘訳, ウィトゲンシュタイン全集9, 大修館書店, 1975年(引用において「OC」と表示)
- , *Remarks on the Philosophy of Psychology, vol I*. G. E. M. Anscombe and G. H. von Wright (eds). Trans. G. E. M. Anscombe Basil Blackwell, 1980, 『心理学の哲学1』佐藤徹郎訳, ウィトゲンシュタイン全集 補巻1, 大修館書店, 1985年(引用において「RPP1」と表示)
- , *Remarks on the Philosophy of Psychology, vol II*. G. H. von Wright and Heikki Nyman (eds). Trans. C. G. Luckhardt and M. A. E. Aue, Basil Blackwell, 1980, 『心理学の哲学2』野家啓一訳, ウィトゲンシュタイン全集 補巻2, 大修館書店, 1988年(引用において「RPP2」と表示)
- , *Cambridge Letters Correspondence with Russell, Keynes, Moore, Ramsey and Sraffa*. Brian MaGuinness and G. H. von Wright (eds.). Blackwell Publishers, 1995 (引用において「CL」と表示)
- Wright, von G. H. [1972], 'Wittgenstein on Certainty' in *Wittgenstein*. University of Minnesota Press.

キーワード：知識、確実さ、言語ゲーム、認識的、文法規則

Abstract

Summary of the 'Study of Wittgenstein's *On Certainty*'

Satoshi Hashimoto

Certainty is one of the themes which Wittgenstein was interested in.

His thoughts are left in the form of notes named *On Certainty*. He has put down in it a series of remarks on the usage of such words as 'knowledge', 'doubt', 'belief', 'certainty', etc. and the foundation of language-games related to them.

I try in this paper to illuminate how the ordinary language-games about knowledge, doubt, belief, etc. relate with 'unshakeable things (Moore-type propositions (Marie McGinn), hinges (Danièle Moyal-Sharrock))'.

Certainty belongs to 'unshakeable things' that underlie all our ordinary language-games. Knowledge and certainty belong to different layers of our epistemic capacities (different categories).

McGinn showed that Moore-type propositions can not be used in epistemic context.

Moyal-Sharrock showed that hinges are rules of grammar and that they can manifest themselves only in what we say and do.

But they could not definitely distinguish the certainty of the 'unshakeable things' from their causes.

Keywords: knowledge, certainty, language-game, epistemic, rule of grammar